

2012

Vol.
7

専修大学のビジョンと現状

Si-report

Socio-Intelligence report



建学の精神と21世紀ビジョン 「社会知性の開発」

専修大学は、1880年（明治13年）、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、日賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラガーズ大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによって極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」を21世紀ビジョンに据えました。

今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題は山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。

専修大学21世紀ビジョン

「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも
深い人間理解と倫理観を持ち
地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に
取り組んでいける能力である



神田キャンパス周辺(東京都千代田区)

オール専修の力を結集し、
「社会知性の開発」を促進する

学校法人専修大学理事長
専修大学長

日高 義博

専修大学は、創立150年に向けて更なる教育研究力の強化や学生支援の充実、キャンパス構想を具体化する環境の整備などに積極的に取り組んでまいります。

2011年度は、東日本大震災の発生により、本学でも様々な影響を受け対応・対策に尽力してきました。震災直後の日本武道館での卒業式及び入学式の中止という無念の措置を始め、損傷した建物の解体・補修工事の実施や耐震補強対策、被災学生への学費減免特別措置の遂行など、本学の長い歴史の中でも緊急を要する対応の連続でした。

しかし、本学の130数年に及ぶ歴史を振り返れば、関東大震災や第二次世界大戦の戦禍など数々の難局からも復興を遂げ、いつの時代にも社会に有為な人材を生み出してきました。現在、21世紀ビジョンとして「社会知性の開発」を掲げ、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に、大学運営に邁進しております。

2012年の4月からは、法学部一部の全授業を神田キャンパスに集約し、法学教育の更なる充実を目指しています。昨今の課題である「学士課程の構築」に向けて、教養教育と専門教育とを連携し、専修大学スタンダードを築くために各機関で議論を進めています。

教育研究環境の整備については、現在、キャンパス構想検討会議において短期的課題と中・長期的課題を仕分けしながら策定しています。短期的課題としては、生田キャンパスでは震災により着工が延期されていた国際交流会館（仮称）の建設、生田6号館、第一体育寮などの建て替えがあります。神田キャンパスについては、図書館の改装、神田5号館の建て替えなどです。中・長期的課題の検討に際しては、今後の18歳人口の更なる減少、都心回帰の更なる進行などを考慮に入れながら、2つのキャンパスが有機的な機能を持つように策定することが必要だと考えています。

オール専修の力を結集して諸課題を解決し、「社会知性の開発」を促進していく所存です。

Profile

1948年（昭和23年）宮崎県生まれ。70年（昭和45年）専修大学法学部卒業。75年（昭和50年）明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。84年（昭和59年）専修大学法学部教授。2004年（平成16年）法科大学院教授。同年学長（現在に至る）。2006年（平成18年）理事長就任（現在に至る）。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考査委員、法制審議会臨時委員、一般社団法人日本私立大学連盟監事などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』（慶應通信）、『刑法における錯認論の新展開』（成文堂）、『違法性の基礎理論』（イウス出版）など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。



歴史に学び未来へ — Topics —

専修大学創立者一人であり財政学の権威「田尻稻次郎展」を開催

鹿児島が生んだ偉人・田尻稻次郎(たじりいなじろう)は、専修大学創立者一人であり、財政学の権威として明治から大正にかけて活躍した経済学者でもあります。そんな彼の生涯と業績を追った「日本の財政学を築いた薩摩藩士～専修大学創立者・田尻稻次郎の生涯～」展が、専修大学と鹿児島県歴史資料センター黎明館の合同企画展として開催されました。

この企画展は、経済・財政学者、教育者など、様々な顔を持つ田尻の人物像や人間関係を追うとともに、近代日本において財政学が国家形成に果たした役割を紹介したもので、2011年11月22日から2012年1月9日まで鹿児島市の鹿児島県歴史資料センター黎明館で開催。期間中は記念講演会やシンポジウム開催のほか、専修大学創立130周年記念映画『学校をつくろう』も上映されました。

12月18日に黎明館で行われたシンポジウムでは、永江雅和経済学部教授、徳永和喜氏(黎明館学芸課長)、瀬戸口龍一氏(専修大学大学史資料課)が、田尻を様々な視点から解説。永江教授は「近代国家の財政を安定させた有能な裏方として名が挙がる人が田尻。明治財政史を考えるうえで非常に重要な人物であり、ミスター大蔵省だった。更に政府財政のチェック機関である会計検査院の基礎づくりをした。会計検査院長としての役割も大きかった」と、田尻の近代日本の財政および金融制度への貢献について語りました。また、瀬戸口氏は「田尻は米国留学中、当時としては珍しく経済学を学んだ。当時、日本では経済学は文学部や法学部の一つの科目しかなかった。経済学を組織的・体系的に教えたのは、専修学校(現在の専修大学)だけだった」と、専修学校における田尻の業績を紹介。徳永氏は、田尻の人間像に触れ、「田尻が外国で勉強したいと考えた背景には、島津斉彬(第10代薩摩藩主)ら薩摩人の教育観があったのではないか。薩摩藩は開成所を設置、当時の一流の人材を講師として呼んだ。また語学を大事にし、言葉そのものではなく、語学から文化や生き方を学ぶ姿勢を大切にした。壮大な国家観が田尻に受け継がれている。『今、大事にすべきものはなにか』を念頭に常に当たつた」と語りました。

企画展にはおよそ2000人が来場。田尻の生涯と業績の展示から、明治・大正という近代日本に触れました。

田尻稻次郎の『道』—相馬・目賀田・駒井との出会いと専修学校の創立

田尻稻次郎(1850~1923)は薩摩藩士・田尻次兵衛の三男として京都で生まれ、薩摩藩の開成所や大学南校(現・東京大学)などを経て米国へ留学。エール大学、同大学大学院で経済学を学び、帰国後は大蔵官僚に。日本にフランス財政学を持ち込むなど財政・金融制度の確立に尽力しました。

1880(明治13)年には、相馬永胤(そうま・ながたね)、目賀田種太郎(めがた・たねたろう)、駒井重格(こまい・しげただら)と共に専修学校(現・専修大学)を創立。官僚として働きながら、専修学校をはじめ、現在の東京大学、一橋大学などでも講義を行い、後に大蔵官僚や経済学者として活躍する人材の育成にも注力しました。

田尻稻次郎の隠れた素顔「きたなり」

専修大学創立者、ミスター大蔵省といった輝かしい経歴ばかりが目に留まる田尻稻次郎ですが、実は意外な逸話が残っています。質素を旨とし、衣服にかまわず毎日同じものを着ていたそうです。そのことから「きたなり」との愛称で親しまれています。「きたなり」は、田尻の号、北雷(きたなり)の由来でもあります。



田尻稻次郎の胸像



展示された「北雷」の書など

神田キャンパスに法学教育が集約

2012年4月から、法学部(法律学科・政治学科)の1年次生から4年次生までの全ての授業を神田キャンパス(東京都千代田区)で行います。

これまで、一部法学部の学生は、1年次生の1年間は生田キャンパス(神奈川県川崎市)へ、2年次生からは神田キャンパスと2つのキャンパスへ通学していました。しかし今後は、法学部・大学院法学研究科・専門職大学院(法科大学院)の法学教育機能がすべて神田キャンパスに集約することになります。同一のキャンパス内に学部の1年次生から大学院、専門職大学院までの学生が揃うことにより、導入教育の充実や法学の一貫した指導、学生同士はもちろん教員とのコミュニケーションの活発化など様々な効果が期待されます。

また、神田キャンパスには、最高裁判所や霞が関官庁街、国会議事堂などにもアクセスしやすい立地であることや、周辺は昔から本の街として知られているなど、法律学や政治学を学ぶ学生にとって最適な学外環境があります。さらに、学内の環境についても、今回の法学教育の集約に伴い、学生が落ち着いて学ぶことができるような整備を順次行っています。この一環として、現在の5号館校舎の建て替えが決定されました。新5号館は「考える、まとめる、情報を獲得する、交流する、表現する」といった学習を支援する機能を備え、本学の知的活動を表現する外観を持った校舎として建設計画を進めています。



神田新5号館完成イメージ図

全日本大学サッカー選手権大会初優勝! 大学サッカー日本一

2012年に創立50周年を迎える専修大学サッカーチーム。第60回全日本大学サッカー選手権大会決勝戦(2012年1月5日、東京・国立競技場)で、明治大学を3-0で打ち破り初の大学日本一に。

前半は何度もピンチを迎ながらも、ゴールキーパー・朴泰希さん(当時法学部4年)を中心に死守、後半へ。源平貴久監督の提唱する「攻撃的で美しいサッカー」が花開き、全日本初挑戦にも関わらず優勝という快挙を遂げました。この大会では、主将の庄司悦大さん(当時経済学部4年)が最優秀選手賞を受賞しています。

一見華やかなサッカーチームですが、ここまで道程は決して平坦ではありません。2005年に関東大学サッカーリーグ1部昇格を果たしますが、2010年までは1部と2部の入れ替わりを繰り返します。練習環境も恵まれているわけではなく、部としての練習は平日の早朝6時~8時30分の限定期間のみ。練習場はサッカーチーム専用グラウンドではないのです。制約のある環境の中、源平監督のもと、部員一人ひとりが高い意識と明確な目標をもって懸命に練習に取り組んできました。彼らの地道な努力により大学日本一という大きな称号を得ることができたのです。

サッカーチームは、川崎市長、神奈川県知事をそれぞれ表敬訪問し日本一を報告。地域からの期待も受け、これからも向上心と努力で上を目指し続けます。



(写真:鈴木詩織さん・文2)



学生を基本にすえた大学づくり

—考え方・行動する学生たちと支える大学—

Si-report

Vol
7



災害救援ボランティア講座修了の有志学生が結成「SKV」



● 災害ボランティアを経て、防災の重要性を広める

「防災は生きていいくうえでなくてはならないもの」をスローガンに掲げ、学生

有志団体「SKV(エスケーブイ : Senshu Kanda Volunteer)」は2010年に発足しました。現在、会員は27人。「防災」、「地域貢献」、「エコキヤップ」の3つを活動の柱に据え、防災技術の向上と一般学生の防災意識を高めることを目指しています。

発足して間もない団体ですが、2011年3月11日に起きた東日本大震災をきっかけに活動が活発化。本学で開講の「災害救援ボランティア講座」修了の学生有志が結成した団体であるため、メンバーは全員が災害救援ボランティア推進委員会(災害ボランティアの育成、防災教育を推進する民間団体)からセーフティリーダー認定証、東京消防庁から上級救命技能認定証を取得しています。被災地・石巻市での2回のボランティア活動(2011年4月は有志による活動、8月には学生部主催で実施)には、ほぼ全員が参加し瓦礫や汚泥の撤去、被災者宅の清掃に尽力しました。

代表の高橋晴弥さん(法学部2年)は「研修を受けてはいましたが、予想外の出来事の連続でした。被災地は津波による被害のため、泥の中に包丁が埋もれているなど、とにかく歩くだけでも困難でした。ただ4月には瓦礫の山だった場所が8月に再訪したときには更地となり草木が生え、街の様子が変わっている光景をみて活動に意味があるのだと実感しました」と当時を回想します。とはいえ、2回の活動を終えたとき、「連日、被災地の悲惨な状況が報道されているにも関わらず、東京では防災の対策をしていないことに疑問を抱きました。たしかに被災地で失った命は数知れません。しかし、防災の知識があれば、もしもまた同じような状況に陥ったときに救える命が多くある」という想いが、高橋さんの胸に込み上げてきたといいます。こうした想いから、SKVでは八王子北高校や本学などで、実際に遭遇の可能性がある場面を想定し、その対処法をシミュレーションしながら救命技術を学ぶ実践型の救命講習会を積極的に行ってています。

高橋さんはこう語ります。「東京で防災活動を広めていくパイオニアを目指していきたい。まずは、地域の人たちが困ったらSKVに頼ってもらえるような存在になりたい」と。『神田エリアのなんでも屋』、SKVが目指す大きな目標への第一歩です。

● 地域コミュニティへも積極的に

SKVの活動は「防災」だけではありません。「地域貢献」、「エコキヤップ」の活動にも取り組んでいます。エコキヤップ活動では、神田キャンパス内にペットボトルのキヤップ回収箱を設置し、月に数回メンバーが回収を行います。キヤップをリサイクルすることで途上国などの子どもたちのワクチンが購入できます。一方、地域貢献活動では、月に一度、神田キャンパス周辺の清掃活動を行っています。副代表の植木貴文さん(法学部2年)は「定期的に活動することで、町内会役員の方から、靖国神社の桜祭りを手伝ってほしいと声を掛けて頂いたり、社会人サークルの方からも“清掃と一緒にやりましょう”と提案を受けるようになってきました。今後も機会を逃さないように、どんな仕事でもトライしていくたいと思っています。情報や活動を発信することも重要ですが、まずは地域の方と仲良くなることです」と、SKVの活動の幅を広げることに力を入れています。

専修大学では、2010年度から「災害救援ボランティア講座」を前期と後期に神田キャンパスで開講しています。「自分の身は自分で守る」ための座学講習や災害模擬体験、実技講習など3日間の講習です。修了すると「セーフティリーダー認定証」、「上級救命技能認定証」が交付されます。本学学生であれば受講料は無料。

講座修了後に希望すると、神田キャンパスで学ぶ学生は「SKV(Senshu Kanda Volunteer)」、生田キャンパスで学ぶ学生は「SIV(Senshu Ikuta Volunteer)」に加入することができます。「SKV」「SIV」は、現在は本学学生生活課の傘下団体として活動しています。

被災学生の支援へ願いを込め、日高学長著『読書と人生』刊行



● 日高学長が新書『読書と人生』を刊行

2011年7月、新書判SI Libretto(エスアイ・リブレット)シリーズ第5弾として、『読書と人生 - 刑法学者による百学百話 -』(日高義博学長 著)を刊行しました。

本書は4部構成から成り、「I 読書と人生」は入間市立図書館主催で行われた「国民読書年記念文学講演会」(2010年11月開催)の講演録、「II 読書隨想」、「III 滞独隨想」、「IV 坐忘居隨想」は、日高学長がこれまでに執筆した読書にまつわる隨想やドイツ留学中の文章などを収めた内容となっています。

タイトルにもなった「I 読書と人生」では、日高学長の幼少期からこれまでの書物との出会い、読書方法などが振り返られ、自身の思索の過程を辿るかのような内容が講演そのままの口語調で収録されています。研究分野を深めながらも、一方で幅広い領域に知的好奇心を巡らせ様々に吸収していく姿勢は、学生への指南書ともなり得る書籍です。本書では、日高学長の専門分野である刑法学の背景に広がる、知識と教養の奥深さを窺い知ることができます。

本書が第5弾となった新書判SI Librettoシリーズは、専修大学の教育力・研究力をもとにした「知の発信」を、社会に対し積極的に行うことの目的として、専修大学出版局より刊行しているものです。これまでに4作品(『人は何を旅してきたか』、『身近な経済学 - 小田急沿線の生活風景』、『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』、『「生きづらさ」の時代 香山リカ×上野千鶴子+専大生』)を刊行しています。

● 被災学生の一助として「教育研究振興協力資金」へ

2011年3月に発生した東日本大震災は、甚大かつ深刻な被害をもたらしました。激震地であった石巻専修大学では、被災した多数の学生が修学や生活など様々な困難を抱えることとなっていました。専修大学にあっても、被災地出身の学生やご家族は経済的にも厳しい状況にあります。

この震災が『読書と人生』制作の最中にあったことから、日高学長は、本書を被災した学生の支援に役立てたいと考えました。この願いを受け、本書の売上げは「専修大学教育研究振興協力資金」へ充てられることとなりました。

「専修大学教育研究振興協力資金」は、“学生を基本にすえた大学づくり”的理念のもと、教育研究の充実や施設設備の整備拡充等を目的にした専修大学の募金活動です。このたび、被災した学生への奨学金及び生活支援金等に充てることを目的に加え、広く支援資金を募っています。

◆ 被災学生への学費減免特別措置を実施 ◆

2011年度には、東日本大震災により甚大な被害に遭った学生への修学支援目的として、学費減免特別措置を実施しました。対象は2011年度の在学生と2012年度入学生とし、震災による家屋被害や経済的困難に対し支援を行いました。(受付期間は終了しています)

意欲ある学生の勉学の機会が失われることのないように、本学では様々な援助を行っています。

Si-report

Vol
7

社会知性を育む教育

課題解決型インターンシップで取り組む「北部市場を活性化」

「市場めし」の新メニュー開発に挑む

「課題解決型インターンシップ」は、本学のキャリアデザインセンターが提供するプログラムの一つで川崎市内の企業や自治体などの課題に学生たちが主体的に取り組むというもの。この一環として、2011年度には川崎市中央卸売市場北部市場の活性化に向け、学生たちが市場内の飲食店「そば凧さか本」「キッチンシェット」と協力し、魚を使った丼「市場めし」を開発しました。

新メニューの開発に臨んだのは、商学部の石川和男ゼミ7人と岩尾詠一郎ゼミの7人(当時3年次生)。ゼミ毎に協力店舗を担当し、新メニューを考案しました。石川ゼミのリーダー金井里紗さんは「400人以上からアンケートをとり、顧客のニーズを考え、一方で、コストを抑えるために魚の切り方を工夫したりと試行錯誤を重ねました」と話し、岩尾ゼミのリーダー宮内陽香さんは「新鮮な魚を食べたいという調査結果から、それぞれの季節に合った旬の魚を使おうと考えました」と語ります。両ゼミとも、戦略を練り、アイデアを出し合い、また店主ら関係者との交渉に苦心しながらも懸命に取り組みました。

石川ゼミ開発の「3色ユッケの市場丼」はマグロ、サーモン、イカの刺身にアボガド、キュウリなどを加えユッケジャン風味のタレをかけて食べる丼。岩尾ゼミの「3fish旬丼」は和風ダレに漬けたマグロ、ブリ、サンマ(魚は旬のものを使用)の唐揚げが盛られています。市場のイベントを機に各店舗で販売を開始したこれらのメニューは、今や定番として訪れる食通たちの舌を唸らせています。



岩尾ゼミ考案「3fish旬丼(トリフルフィッシュドン)」



石川ゼミ考案「3色ユッケの市場丼(いちばんどん)」

取材最前線の記者・ジャーナリストから講義 ～文学部人文・ジャーナリズム学科協力講座～

国際報道における現場立脚主義のススメ

人文・ジャーナリズム学科では、協力講座として記者・ジャーナリストから取材現場の生の声を聞く授業を開講しています。2011年度は前期に3科目、後期に1科目が行われました。その一つ、毎日新聞社との「国際ジャーナリズム論」では、国際報道の最前線にいた特派員経験者が学生たちに講義。授業ではテーマごとに毎回講師陣が変わり、取材現場の体験談やジャーナリストとしての姿勢を熱く語ります。

2011年6月に行われた授業では、毎日新聞外信部の大治朋子編集委員が講師を担当。大治氏は北米総局(ワシントン)特派員時代に対テロ戦争に関わる報道記事で国際理解促進に貢献したとして表彰されるなど実力ある記者。「調査報道」というテーマで、これまで知られていなかった政治や社会の不正などを解明し、改善を促す報道についてを解説。毎日新聞の記事となった実例を紹介しながら、報道の社会への影響力を語りました。大治氏は「事象に近づく『虫の眼』、全体を見る『鳥の眼』、その事象を時代の流れの中で捉える『魚の眼』をもつことが必要」。また、「新聞記者は、日常の生活で生じる感性や『これはおかしい』というシロウト感覚が大事。そして『知りたい』という強い動機があれば厚い壁は乗り越えられる」と真剣な眼差しの学生たちへ伝えました。

この他、日本写真家協会と協力し報道写真の持つ力を伝える「報道写真論」などを展開。2012年度は世界を舞台に活躍する長倉洋海講師が登場します。

○ 2012年度実施の協力講座

- 「協力講座『国際ジャーナリズム論』(毎日新聞社)」*後期開講科目
- 「協力講座『報道写真論』(写真家協会)」*前期開講科目
- 「協力講座『沖縄ジャーナリズム論』(沖縄タイムス社)」夏期集中 *前期開講科目
- 「協力講座『政治ジャーナリズム論』(読売新聞社)」*後期開講科目

ホワイトスペース特区事業「かわさきワンセグ キャンバスライブ」



ロゴ作成は長谷部恵美さん

地域密着型コミュニティ放送局「かわさきワンセグ」を学生たちが配信

ネットワーク情報学部福富忠和教授が提案した「生田キャンパス周辺エリアワンセグ情報配信サービス」が、2011年4月に総務省から「ホワイトスペース特区」として認可を受けました。ホワイトスペース特区は、テレビ放送用電波のなかで使用されていない領域を指し、地域活性化やビジネス展開など新しい可能性を模索するスペースとして活用されています。

このことから、福富プロジェクトの学生たちが中心となり、地域密着型コミュニティ放送局「かわさきワンセグ」の実験的な配信が同年9月より始まりました。大学が独自でワンセグを配信するのは珍しく、関東では初めての試み。福富教授は「ワンセグは、地上デジタル放送規格の一つで、携帯電話などで映像を受信できるサービス。災害時の情報や地域情報の伝達手段として威力を發揮します」と語ります。

「かわさきワンセグ」は生田キャンパスに基地局を置き、プロジェクトのメンバーが中心になってコンテンツ制作を行います。これまでには「多摩区3大学コンサート」、「かわさきハロウインパレード」の放送、「川崎市総合防災

訓練」への参加など、産官学と連携しながら制作に取り組んできました。2011年9月13日からは全12回にわたり、かわさきFMと共に、キャンパスの様子を伝える「キャンバスライブ」を生放送で配信。エリア限定ながら民間エフエム局とワンセグ局が共同制作するのは初めての試みです。この放送が好評だったため、2クール目は番組を15分から30分に拡大し毎週火曜日12時~12時30分(2012年1月24日~3月27日)に生放送で配信。4月以降に3クール目の放送も決定しました。

リーダーの鈴木康平さん(4年次生)は「放送時間が授業と重なっているメンバーもいて、リーダーとしてチームを結束させるのには骨を折りました。また、取材や広告作成など、ゼロから一つの番組を作り上げる難しさを実感しました」と語ります。ナレーターとして活躍した鈴木萌未さん(4年次生)は「プロのアナウンサーの言葉遣いや会話の運び方を間近で学ぶことができました」と話します。

この取り組みに対して福富教授は、「一つの番組は、取材、映像、広告など、様々な要素に分解することができます。逆をいえば、これらの要素が合わさって番組が構成されているわけです。大学の授業では、まずこれらの要素を一つ一つ学んでから、コンテンツを作るというプロセスを踏みます。しかし実社会では逆になることが多い。コンテンツを制作しながら、その場に応じてスキルや知識を習得していく必要があります。つまり、経験を通してスキルや知識を血肉化していくわけです。学生たちが今回の経験を通して、概念モデルを築いてくれればと思っています」と語ります。

2012年度以降、福富教授は「生田キャンパス周辺エリアワンセグ情報配信サービス」を更に充実させることを企画しています。「映像などを教える大学はありますが、配信システムを備えている大学はありません。ワンセグは最小限のハンドリングで運営できる放送局です。教育用途としても魅力的だと思います」と、ワンセグを利用した教育の可能性に期待を膨らませます。

「平成23年度 大学発・政策提案制度」に福富教授のエリアワンセグ事業が採択

神奈川県が県内所在の大学から県政に係る政策提案を募集する「大学発・政策提案制度」に、福富教授の事業が採択されました。これを受け、平成24年度より1年間の研究期間として大学と県が協働で事業を行うことになります。
 <提案名称>「大規模災害時に携帯電話へエリアワンセグ配信を行うための臨時災害放送の設計と、県内市町村、放送局・情報通信連携によるマルチモーダルな災害情報基盤の整備・制度化の推進」
 <研究拠点> 情報通信研究センター(研究代表者:福富忠和ネットワーク情報学部教授)



キャンバスライブ第一回の様子

視点

2

知の発信のための研究開発

「向井家江戸期和本コレクション」—江戸後期の小説約4,000作を所蔵

● 江戸の都市文芸が現代文学の祖

「向井家江戸期和本コレクション」は、本学の創立130周年を記念して専修大学図書館が購入した貴重なコレクションです。これは、故向井信夫氏が収集した江戸後期の小説を総称するいわゆる「戯作(げさく)」で、曲亭馬琴作の『南総里見八犬伝』などの読本や草双紙など、その作品数は4000作近く、冊数になると1万冊を優に超えています。

戯作は江戸を中心に栄えた都市文芸で、洒落本、読本、草双紙、滑稽本、人情本などの様々なジャンルに分かれ、明治前期まで広く読まれました。文学部の板坂則子教授は「江戸戯作」を研究テーマとしていることから、向井氏を師と仰ぎ、コレクションには深く関わってきました。板坂教授は「戯作は出版文化メディアの中で育まれた商品としての特性を色濃く帯びています。それまでの長い歴史の中で、貴族しか手にできないステータスシンボルでもあった書物が、初めて一般大衆化したのです」と解説します。また戯作のストーリー構成については、「戯作は大衆に愛された書物であり、現代日本の書店に並ぶ様々なジャンルのストーリーの多くは、既に戯作の中に備わっています」とも述べます。本文と挿絵が共存する現在の絵本や漫画の原型である草双紙や、歴史大河小説、長編ファンタジーなどの元となっている読本などが一例のようです。

大衆文学の祖である戯作を中心とした向井コレクションを、これまでに本学では『江戸の文華』、『水滸伝vs八犬伝』などの企画展を通して展示公開してきました。「2012年には専修大学図書館が設立100周年を迎えます。この機会に若い人たちが向井コレクションを手にとって見られるような企画を考えていきたい。海外での展示会も画策したいですね。」蔵書を眠らせることがなく研究者や大学院生の研究に活用されることを好んだ向井氏の遺志を活かし、コレクションを広く公開していくことで、多くの人に江戸の文化に触れてほしいと板坂教授は語ります。



偽紫田舎源氏

向井家江戸期和本コレクション

向井信夫氏(1916年生まれ・享年77歳)が戦後すぐから蒐集した江戸戯作のコレクション。
江戸読本では『南総里見八犬伝』(曲亭馬琴作)を筆頭とした作品、草双紙では『偽紫田舎源氏』(柳亭種彦作)などの代表作がほぼ揃っている。
2009年度より専修大学図書館所蔵。

「社会知性開発研究センター 各研究拠点の紹介」

「文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業採択」

◆ 東アジア世界史研究センター(研究代表者:荒木敏夫 文学部教授)

『古代東アジア世界史と留学生』

「東アジア」という枠組みの中で日本・中国・朝鮮半島の対外関係史について研究。関係資料のデータベース化にも取り組んだ。2011年度に5年間の研究期間を満了。

「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択」

◆ 心理科学研究センター(研究代表者:長田洋和 人間科学部教授)

『融合的心理科学の創成・心の連続性を探る』(2011年度新規採択)

心理学において、研究対象や研究領域にとらわれない融合的心理科学の創成と「心の連続性」の解明を目指す。研究期間は2015年度まで。

◆ 社会関係資本研究センター(研究代表者:原田博夫 経済学部教授)

『持続的発展に向けての社会関係資本の多様な構築:東アジアのコミュニティ、セキュリティ、市民文化の観点から』

1980年代以降の東アジアの国・地域の経済発展と社会の変貌を3つの観点から総合的に分析・研究するプロジェクト。2009年度に採択され、研究期間は2013年度まで。

視点

3

社会知性の開発を担う人材の輩出

美しい名にふさわしい町を守る

茨城県桜川市長 中田 裕さん(1971年商学部卒業)

「西の吉野、東の桜川」と称される桜の名所。2005年、西茨城郡岩瀬町、真壁郡真壁町、同郡大和村の3町村が合併し桜川市が誕生とともに市長に就任。現在2期目。

「あなた(市民)が主役の町づくりを進めています」とこやかに語る。

同市は名峰・筑波山、加波山などが連なる山々に囲まれ、その裾野には市名になっている桜川が南北に流れる。市内には名所、特産物が数多くある。雨引山樂法寺や富谷山小山寺などの古刹。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された真壁地区の町並み……。

春になれば里山は自生の山桜で鮮やかに彩られ、櫻川磯部稻村神社周辺や磯部櫻川公園の1000本の山桜を目当てに多くの人々でにぎわう。桃の節句には、真壁地区の蔵や民家の軒先に江戸時代からのお雛様が1カ月にわたって飾られ、華やかな雰囲気になる。同地区住民自慢の祭りだ。

「誇るべき文化と歴史を守り、桜川という美しい名にふさわしい町を守りつけたい。自助・共助・公助の精神で」。

専大時代は、剣道部に入り、一に練習、二に練習の毎日。「周りには全国レベルで戦える仲間がたくさんいましたので、刺激を受けました」。

4年次の年、チームは念願の全日本学生剣道大会に出場、3位に入賞した。

卒業後は故郷の岩瀬に戻り、家業の牛乳製造業を継いだ。岩瀬町議、茨城県議、岩瀬町長を経て桜川市のトップに。いつのときも心の支えは、剣道部時代の仲間たちと切磋琢磨した体験だ。

若い人们には「常に前向きに、積極的に」と激励。さらに「元気なあいさつと明るい笑顔を忘れるな」とも。「そこから活路が開かれます」。

(「ニュース専修」より転載)



Si-report

Vol.
7

のだ たけのり

岩手県釜石市長 野田 武則さん(1976年法学部卒業)

若い人が住みたいまちに

2011年11月6日、任期満了に伴う岩手県釜石市長選で、無投票で再選を決めた。

釜石市は東日本大震災で約1100人の死者・行方不明者が出て甚大な被害を受けた。復興計画の早期策定や全半壊した建物の処理、被災者の就職など課題が山積するなか、今後も復興の最前線に立つ。

3月11日、釜石市庁舎で市議会議中に地震に襲われた。窓の外から建ちならぶ家屋やビルをなぎ倒し、車や船を飲み込みながら黒い津波が迫ってきた。庁舎は港から数百メートル。高台にあるため最悪の事態は免れたが、がれきの街と化した。

三陸漁場の釜石は、近代的製鉄業発祥の地であり、鉄道も国内で3番目に開業、日本の近代化の先駆けとなった。

何回も津波に襲われ、戦時中は連合国艦砲射撃を受け、街は廃墟となつたが、そのつど、立ち直った。戦後、新日鐵釜石の本拠地として最盛期には人口9万2000人を数えたが「鉄冷え」により半減。鉄の街から複合産業の街へと歩み始めた矢先の震災だ。

「津波、戦災、人口減……幾多の困難を乗り越えてきたなかでも今回の津波は経験のない試練」と言葉をかみしめる。復旧・復興をどう進めるか。

「これまで以上に産業振興に力を入れ、若い人们が住みたいと思う魅力あるまちに再生したい」

前触れもないに訪れた日常の「寸断」。その衝撃は、自身の人生觀を変えた。「この瞬間を生きる大切さがすべてを感じている。同時に、これまで見失つたものが見えてくることがある。それらを取り戻したい。撓まず、屈せず」。

釜石生まれの釜石育ち。岩手県議を2期務めた後、2007年から現職。次男(経済3)の専大入学時、数十年ぶりに向ヶ丘遊園駅かいわいを訪ねた。「つらかった生田の坂を思い出しましたよ」。合気道、居合道とも2段。

(「ニュース専修」より転載)



Si-report

Vol.
7

「Si-report」とは

「Si」とは……

「社会知性:Socio-Intelligence」の頭文字【S】【I】

と

「SENSHU Intelligence」の頭文字【S】【I】

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。



シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学の【S】と21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の【S】であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球上に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。



専修大学マスコット
「センディ」

マスコット

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるように更にかわいらしくデフォルメしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは2004(平成16)年に制定されました

専修大学 学長室企画課

(神田校舎)〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8
(生田校舎)〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1
Tel:044-911-1252 Fax:044-900-7803
<http://www.senshu-u.ac.jp/>